



秋の野に 乱れて咲ける花の色の

千種にもものを思うころかな

きのつらゆき
紀貫之

秋分の日は「祖先を敬い、亡くなった人をしのぶ日」として、国民の休日になっています。また、彼岸の中日でもあります。

暑さ寒さも彼岸までとはよく言ったもので、朝晩しのごやすくなります。日中との気温差が、秋を彩る草花の色を一段と濃くします。その極め付きが真っ赤な彼岸花です。サンスクリット語でマンジューシヤカ。お彼岸の頃に咲く彼岸花は「曼珠沙華」とか「天上の花」とも呼ばれています。美しい日本の里山が、爽りの秋を迎えます。秋の野を彩る花は、春に劣らずたくさんあります。春の七草に比べて、秋の七草の方が充実感はあるように思います。

各地に記録を残した残暑も一段落し、気がつけば草木はすでに秋の気配が濃くなっています。今ではめったに見られなくなった自生のフジバカ

マ。その昔、美しいお姫様が野辺をさまよひ、ただ悲しみながら亡くなりました。藤のツルをさらして織った袴をつけたなきがらの脇に、名の知れぬ草が生えており、村人は姫をあわれんでその草を「藤袴」と呼ぶようになったと言われています。そのフジバカマも河川敷などの改修などで姿を消し、絶滅危惧種に指定され、100年後の絶滅確率は99%といわれています。

人知れぬ悲しみを抱き、野辺をさまよひ姫の哀切が思い起こされるフジバカマの運命です。秋の七草では、キキョウも絶滅危惧種とされています。やがては「秋の五草」になるというのも、笑えない冗談では済まされません。

身近な野原には外来植物が多くなりましたが、その代償として、私たちは旬を失い、旬の言葉を使い自然とつな

る力が萎えています。つながる力の衰えは、皮肉なこと自然環境や社会環境の劣化としっかり結びついています。

植物に限らず水辺の生き物も、ただ水があれば生きてゆけるといいうものではありません。他の生き物、水草や苔、水辺の植物、それらのものが寄り集まったところで、相互にいのちをつなぎ合って生きています。見方によっては私たちの生活も同じようなものです。

一年で最も変化に富んだ秋、丸ごと秋の味覚や日本人の季節を感じさせるふるさとの秋を探してみたいものです。



指宿市長
豊留悦男